

はじめに

本稿は、天平 19 年 (747)「大安寺伽藍縁起并資財帳」(以下、「大安寺資財帳」とする)にみえる大安寺領墾田の位置比定を試みるものである。対象となる所領は次の通りである。

宿野原 500 町 (うち開田 30 町)

四至は東鴨社、南坂河、西山、北丹生河

志理斯野 100 町

四至は東山并河、南百姓宅、西岡本、北川並山

阿刀野 100 町

四至は東百姓墾田御井、南武賀河、西高山、北阿胡登山道

これらの現地比定については、田中欣治の研究があり、次のように想定している(田中欣治「三重県員弁郡における大安寺墾田について」〈大安寺史編集委員会編『大安寺史・史料』大安寺、1984 年、初発表 1976 年)。

宿野原は旧大安町丹生川付近

志理斯野は旧藤原町白瀬野・志礼石付近

阿刀野は旧大安町三井から竜ヶ岳にかけて

結論からすると首肯し得る見解であり、本稿は田中の研究に多くを負うものであるが、田中が触れていない点で傍証となり得るものがあり、また、山中章により異なる見解が示されているということもあるので(山中章「伊勢国北部における大安寺施入墾田地成立の背景」『ふびと』54、2002 年)、あらためて最初から検討することにする(本稿で言及する小字の位置については、「三重県員弁郡大安町全図」「三重県員弁郡藤原町全図小字割込図」を参照した)。

一 四至における川の表記

位置比定の大きな手がかりとなるのは四至のうちの川である。表記として「川」「河」の二通りがあるが、ことさらに区別したとみなくて良からう。その上で川の表記をみると、固有名詞のある川とない川があることに気づく。固有名詞のない川は、特定しなくとも自明の川、つまり現員弁川を指すとみられる。一方、固有名詞のある川のうち、「武賀河」は、田中や山中も指摘する通り現宇賀川であろう。

二 志理斯野

まず固有名詞のない川が東限、北限となる志理斯野について検討する。志理斯野は員弁川が東と北を流れる地ということになるが、現在の地形でそれを求めるならば、南東に向かって流れてきた員弁川が現藤原町川合付近で、南流してきた相場川と合流し、南に向きを変える辺りで、逆 L 字形に曲がる員弁川に囲まれた地区が相当する。この中に、小字名として「白瀬野」「志礼石」が残っており、田中が指摘する通りこれが志理斯野の遺称地であろう。山中は「志礼石新田」を挙げるが、田中の挙げる小字名の方が適切と思われる。

「大安寺資財帳」では、川は東と北を限っているが、現在の員弁川の流路と対照すると、方位は北で東に振っているとみた方が良い。そうだとすると、西限の「岡本」の「岡」は

現在藤原中学校などが乗る丘陵に比定できる。

問題は、東限・北限に川と並んでみえる山であるが、そもそも員弁川の氾濫原の近くに山を探すことは困難である。強いて現地を求めるならば、河岸段丘縁辺部の林で少し高くなっている部分、例えば下野尻にある春日神社の裏手にある高まりなどは、員弁川の方からみると山状に見えなくもない。とはいえ、この比定にはかなり無理があり、後考を俟ちたい。

三 宿野原

宿野原と阿刀野は、南北限あるいは南限が川となっているので、川は東西に流れていることになる。現在の地形によれば、員弁川左岸ではその支流はおおむね北から南に流れ、右岸では西から東に流れて員弁川に合流している。したがって、宿野原、阿刀野とも員弁川右岸に求められる。

このうち、宿野原の北限は「丹生河」であるが、現青川の南に「丹生川」の地名があり、この辺りに求められる。山中は 500 町もの広大な面積を確保できる地として、朝明川の北に比定するが、遺称地名とかけ離れていること、員弁郡とみるには無理があること、などの点から、田中の比定の方が妥当である。面積の問題は、南限の「坂河」を現源太川およびその支流の権現川あるいは空川まで含めて考えれば確保できる。

なお、大安町丹生川上にある現鴨神社は、この地区の西寄りにあり、ここを東限とするには難がある。そもそも古代の鴨神社が現鴨神社にあったという明証はないので、田中の推測する通り古代の鴨社はかなり東方にあったと考えざるを得ない。

一方、当該地区の東端部、大安町片樋には、現在延喜式内大神社と称する神社がある。しかしながら、『延喜式』神名帳によれば、太神社は朝明郡にあり、員弁郡ではない。現大神社はもともとは大神神社であり、後世に式内社を現存神社に比定する際に、「大神」社を「大」神社と読み替えて当てたものであろう。ちなみに旧朝明郡においては、東大鐘村に比定されていた太神社が、現四日市市朝明町にある石部神社に合祀されている（式内社研究会編『式内社調査報告』7〈皇學館大学出版部、1977年〉）。

いずれにしても、当該地区全体における式内社の配置は、現状とは異なるのであって、鴨神社の位置も現在と異なる可能性は高い。

四 阿刀野

前述の通り、南限の「武賀河」は現宇賀川であろう。また、東限の「御井」は田中の指摘する通り現在の小字「三井」であろう。この場所は、段丘から員弁川の氾濫原に下りたところで、段丘裾から水が浸み出る位置に当たる。「御井（三井）」と呼ばれるにふさわしい。「御井」は、「大安寺資財帳」の時点で百姓墾田と隣接していることがわかるので、この段階で開墾が可能であった。

北限の「阿胡登山道」は田中が疑問を呈する通り、「阿胡の登山道」か、「阿胡登の山道」か、はたまた「阿胡登山の道」かは判然としないが、小字「三井」の約 1 km 西北のあたりに「古道」の小字があるので、これに相当する可能性がある。西から東に向けて開く谷地形の南辺、丘陵の裾に当たり、上流方向を望むと竜ヶ岳がみえる。

西限の「高山」は田中、山中ともに現竜ヶ岳とするが、小字「三井」から 10 km 近く離

れており、面積が 100 町とするとかなり無理がある。竜ヶ岳は宇賀川の水源に当たるので、領域の西限というよりは、水源の山を確保するという意味があったと推測される。ちなみに、阿刀野はほぼすべてが丘陵上に当たり、水利は丘陵裾の湧き水程度しか望めない。「大安寺資財帳」の時点では阿刀野 100 町は未開であるが、宇賀川上流で取水することによる将来的な開発を見越したものであろうか。

おわりに

以上、一部独自の知見を交えながら田中の位置比定の妥当性を再確認した。現地における古代の遺跡との対応関係などは今後の課題としたい。